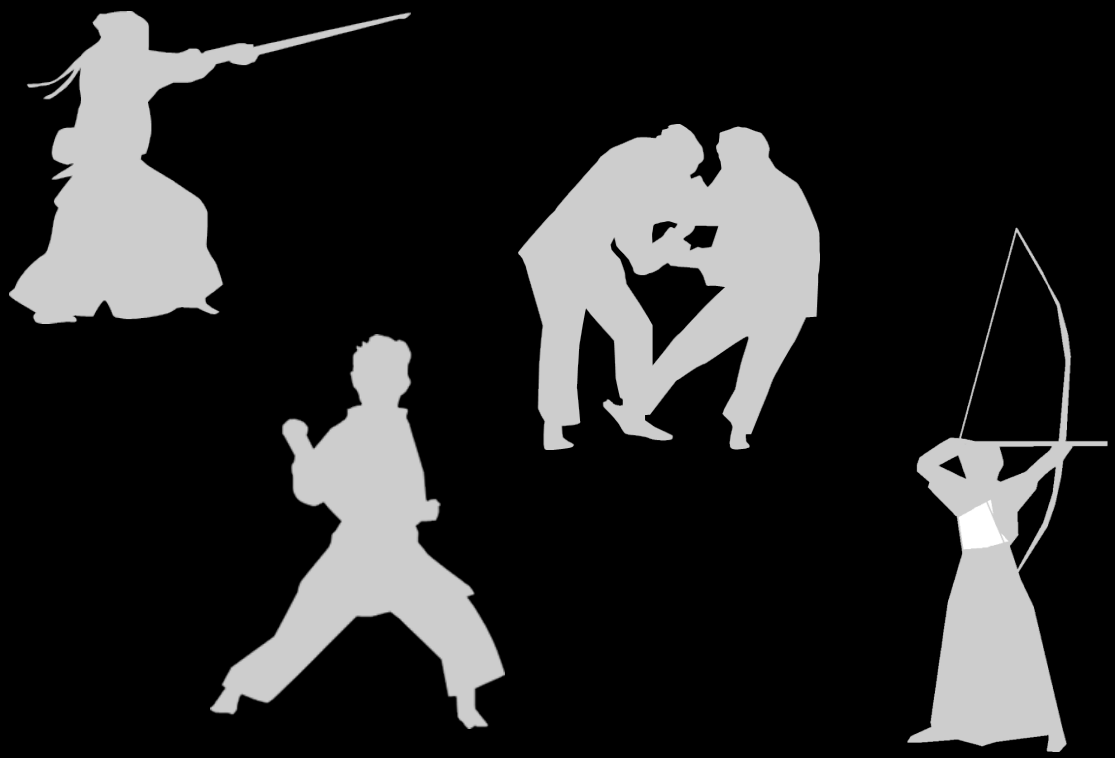
武道学

酒井利信



武道は、そもそも戦いの技術であったものが、その技術の深みを追い求めること自体に意味を見出すようになり、技術習得の過程で自己の精神の内面を深化させ、更にこれを日常に通用する精神性に発展させるような、心身関係を前提とした、世界で稀にみる運動文化へと昇華したものです。

今や世界中で武道の文化性について興味がもたれ、ジャパノロジーの一環として、武道を知ることによって日本を知ろうとするような傾向がみられます。

武道は、日本が世界に発信すべき最大の文化財であるといえるかもしれません。

将来世界を又にかけて活躍する皆さんが、日本人の場合には、本講義でまずは自国の文化的独自性を自覚し、また外国人の皆さんにおいては武道から日本を肌で感じてもらいたいと思います。

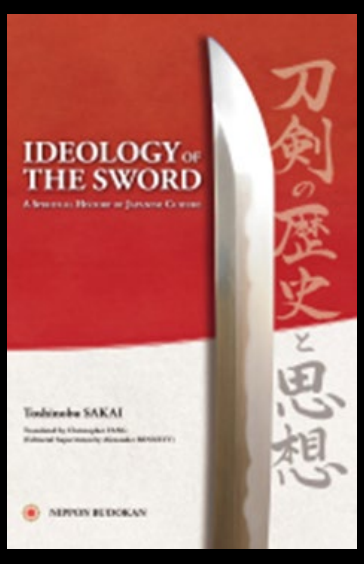
私の仕事は、大学教員として、最先端の研究成果を皆さんに発信することです。

私は武道学領域の教員ですが、剣道が専門ですので問題意識は武道の中でも剣道にあります。

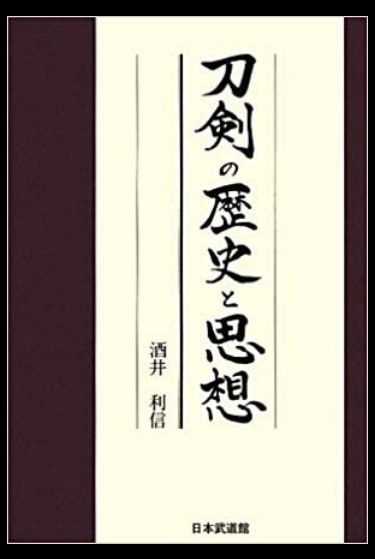
剣道の稽古をする中で磨いてきた感性にもとづいて進めてきた研究で、私のライフワークともいえる「刀剣の思想」をテーマに、本講義を組み立てていきます。

具体的には、博士論文を完成させた後に依頼され、2年間24回にわたって月刊「武道」に連載した原稿をテキストとして講義を展開します。

この原稿は、連載後に『刀剣の歴史と思想』（日本武道館）として出版されています。



2014



2011

2005

新連載

刀剣の歴史と思想

第1回

酒井　利信

探究の旅をはじめるにあたって

武道、とくに剣道にとって刀剣の思想は重要である。

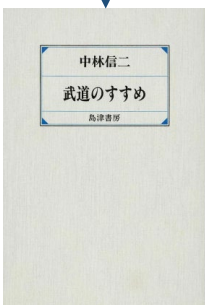
剣道がそもそも刀剣の操作方法から発展したものであるということ以上に、剣道・武道の文化性ということに焦点を当てた時、さらにその重要性ははっきりと浮かび上がってくる。

我々は、単なる競技として以上の深い含みのあるものを実践しているという誇りをもちつつ、日々稽古をしている。我々が誇りに思うもののその正体を一言でいえば、文化性ということになろう。刀剣の思想は、剣道・武道の最も重要な文化性の一側面である。

これを実践を通した感性をもって学術的に解明し、さらにそれを社会に還元するのが私の仕事である。

刀剣の思想とは、端的に言えば、刀剣を単なる武器としてではなく神聖なものとして観念する思想である。剣道にかぎらず、武道にかぎらず、日本精神史全般にかかわるもので、実に奥が深い。この問題に取り組んですでに二十年になるが、まだ研究半ばであり、これまでに得られた知見をベースに、この執筆を通して読者諸賢とともにその正体を探っていきたいと考えている。

このテーマの動機、対象の範囲、アプローチの方法、問題の本質、研究の進捗状況、今後の方向性などを明確にし、また今後一緒に論を進めていく等身大の私自身を理解してもらいたいという意図から、この研究にたずさわった当時から今日に至るまでを時系列に述懐しておこうと思う。



＊研究は、未解決問題の解明である
天才は未解決問題を多く提起する

EX.数学7大難問
アメリカのクレイ数学研究所によって2000年に発表された100万ドルの懸賞金がかけられている7つの問題のことである。
未解決問題と結論の予想が提示されているが、証明することが出来ていない難問。

刀剣の歴史と思想

第１回「探究の旅をはじめるにあたって」

Key Person 1

▼中林メモとの出合い

剣道の稽古をする中で、幼少より「竹刀を日本刀と思いなさい」、「打つのではなく斬らなくてはいけない」等々の教えを受けながら、何となくそれを鵜呑みにしてきたものが、大学で卒業論文を作成するにあたり、どうも剣道の技術観には日本人特有の刀剣に対する思いが関係しているようだということに気付いた。これがこのテーマに入り込む動機であった。

当時、筑波大学の武道論研究室では、中林信二先生が助教授として教鞭を執っておられたが、残念なことに私が大学四年生の春に若くして他界されてしまい、卒論作成の時には先生はすでにいらっしゃらなかった。＊中林先生は武道学のパイオニア的存在であり、武道文化に関する多くの問題を提起された。先生が亡くなられた直後、先輩方が先生の書類などを整理していると、「日本人の刀剣観」について学会発表された際のメモのようなものが出てきた。それを、ちょうどこの問題に興味を持ちはじめていた私に見せてくれたことがある。ほとんどが箇条書きのようなものであり未解決のままであったが、そのメモから、剣道の文化性の一つである日本人の刀剣に対する意識、つまり刀剣思想が、剣道・武道に限ったものではなく実にさまざまな領域にかかわっていること、そして長い歴史の中で育まれてきた観念であること、さらにどうも古代神話に要点がありそうであること、を窺い知ることができた。

このメモは、その後二十年の私の研究を方向づけてくれたものである。今思えば、この中林メモとの出合いは意図してもできない偶然で、まるで何かに導かれたかのようである。―このメモは、後に遺作集刊行会がまとめた『武道論考』に収められる。

中林信二著『武道論考』

＊推薦図書『武道のすすめ』

▼東アジア三国への視線

中林先生は、武道思想を探究するため、体育の枠にとどまることなく、東大の倫理学研究室といった哲学思想の専門の分野に

酒井　利信（さかい・としのぶ）

昭和39年（1964）生まれ。剣道教士七段。
筑波大学卒業後、同大学院修了。平成14年筑波大学より博士（体育科学）の学位を取得。現在、筑波大学人間総合科学研究科体育科学専攻准教授として武道文化論、武道思想史を中心に教鞭をとるかたわら、体育会剣道部副部長として後進の指導にあたっている。全日本剣道連盟資料小委員会委員、日本武道学会剣道専門分科会幹事、身体運動文化学会常任理事、武道文化フォーラム理事。
平成17年筑波大学河本体育科学研究奨励賞、19年日本武道学会優秀論文賞受賞。
主著に『日本精神史としての刀剣観』（第一書房）、『武道文化の探求』（不昧堂出版・共著）、『剣道の歴史』（全日本剣道連盟・共著）など。

＊EX.金子國夫「神話伝説に表徴される剣術（刀剣）についての考察」1977

高橋先生談：
師を亡くすと苦労する

Key Person 2

出向いて研究活動をされていた。また、筑波大学哲学・思想学系倫理学の教授であった高橋進先生とも懇意にされていた。東洋思想では世界的権威である。高橋先生は、中林先生亡き後も先生の息のかかった系列にある私に、本当に懇切丁寧にご指導をしてくださった。温かく、また非常に厳しいご指導でもあった。

刀剣の思想を体系づけて論じた研究は、管見する限りにおいてない。しかし、断片的に論じたものはいくつかある。それらでは、刀剣の思想を取り上げる際、あたかもこれが日本のオリジナルであるかのごとく、その起源を日本古代神話に求める場合がほとんどである。当初、私もそう考えていた。しかし、これを古代については範囲を広げて、中国、朝鮮を含めた東アジア三国の問題として探究してはどうかというサジェスチョンをいただいた。そのことが逆に日本の独自性を浮かび上がらせることにもつながる、との意味も含んでいたと思う。

非常に困難な壁であったが、日本刀剣思想の起点において、これを東アジア三国の思想文化圏のなかで解明していったというのが、私の研究成果の最大のオリジナリティーになっている。

▼文献学への導き

私の研究方法は文献学といわれるもので、文献に記述されている事柄を追いながら、その行間にあるものをも併せて読み解いていくというアプローチの仕方である。したがって扱う史料が一番重要であることは間違いないが、そこに記述されていることと以上のものをどう読み込んで理論構築していくかということが勝負になる。

まだ筑波大学で助手をしていたころ、文献に書かれている刀剣観をどう理解していくかということにおいて、当時私はレヴィ・ストロースに代表される構造人類学を拠りどころとして解釈しようとしていた。門外漢でありながら意を決して参加した倫理学研究会の発表の場で、このやり方は高橋先生から一蹴されることとなる。「研究の方法論は一生かけて作り上げるもの」、「レヴィ・ストロースがどういう思いでこの方法論を作り上げていったか考えたことがあるか」、「人の方法を安易に使うな」、「自分がレヴィ・ストロースにならなくてどうするか」という厳しいもので、会場の空気が一瞬にして凍りついたことを覚えている。大変にショッキングであったが、ありがたいご指導であった。数年かけて勉強したものであったが、これを機にこの方法論をすべて捨てた。後になって思うが、この方法では刀剣思想の本質は論じることができない。

魔の箱根合宿

その後、和辻哲郎の『日本精神史研究』を読むように薦められた。和辻は、明確に方法論を前面に押し出すようなことはしない。したがってその方法論はわかりにくいが、文化産物に発露するその時代の精神を読み解いていくとてつもないセンスと迫力を感じた。和辻の『日本精神史研究』は名著であることに間違いなく、その後何回も読み返したが、正直にいえば私自身まだ十分に消化しきれていない。しかし、そこに人文科学の粋のようなものを感じることは確かである。

高橋先生には、和辻を通して文献学における行間の読み方の雰囲気を教わったよう

Key Person 3

に思っている。今後、自分の方法論を築き上げていく基礎となるはずである。

▼グローバルな視点からみた日本の精神文化

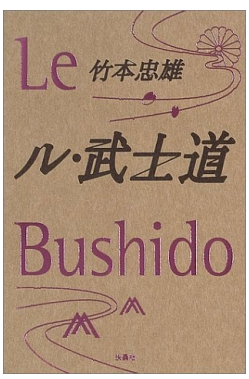
刀剣の思想が、日本文化の問題、その中でも精神性の問題であるということを強く自覚するようになったのは、竹本忠雄先生の影響によるところが大きい。

竹本先生はフランス文学を専門とし、フランスの作家にしてド・ゴール政権下の文化大臣をもつとめたアンドレ・マルローと親交が深く、マルロー研究では第一人者である。「二十一世紀はふたたび精神的（宗教的）時代となるであろう。さもなくば存在しないであろう」という重要な予言をしたマルローは、また日本精神についても深い理解を示していた。来日した際に日本の精神文化に触発されて、那智の滝と伊勢神宮で啓示をうけたといわれ、先生はこれを重視してその著書（『マルローとの対話』人文書院）の中で紹介している。竹本先生は、日本の精神性を聖なるものとして、この素晴らしさを力説する。その言動や文章の迫力たるや、凄まじいものがある。また、宮本武蔵にも造詣が深いなど、武道の精神

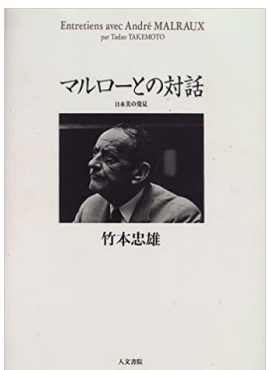
竹本忠雄先生（左）と助手時代の筆者（1997年当時）

那智の滝
＜写真提供ー那智勝浦町観光協会＞

2020 新刊



2004



1969

外からの視線

性に対する理解もある。ご自宅の書斎で長時間にわたりうけたレクチャーが大きなきっかけとなり、私自身、自らの研究課題の本質が実は精神性の問題であると気付いた。

竹本先生のこういった日本精神に対する強い思いは、長年にわたる在仏生活と無関係ではないようである。海外在住の知人の多くが、国内の日本人よりも日本の精神文化を重視しているように思うし、私自身少ない経験ながら外国に行くようになって日本精神の重要性をはっきりと自覚するようになった。さらに言えば、日本人よりもマルローのように外国人の方がこれに強く興味をもち価値を認めている。

グローバルな視点にたったとき、よりはっきりとその重要性が立ち表れてくるということである。刀剣の思想はその中核となるものであり、世界に主張すべき日本の精神文化を問題にしているという自信がもてるようになった。

一里塚

高橋先生からは、早く一里塚を築くようにと言われ続けた。学位論文としてまとめるようにということである。

史料の解釈の仕方が妥当であるのか、本当にこの文章が読み込めているのかという不安との闘いであったが、そのような中、高橋先生はご自身が学位論文を書くにあたって文献の記述をカードに書き込んで研究を進めたということをお聞きした。そのカードの量は、重ねると床から胸の高さにまでなったという。現在では記述の分類などパソコンでそれ用のソフトを使えば簡単にできると思い試してみたが、一向に考えが深まらない。最終的に記述以上の行間を読むのが私たちの仕事であるから、その文章にいかに集中するかが勝負である。カードに書くという行為は、結果としてその文章に気持ちが入り込んでいく方法でもあった。高橋先生直伝の方法が、研究を飛躍的に進めることになったように思う。

高橋先生にはお忙しい中、論文の原稿について一字一句ゆるがせにすることなく読んでいただいた。また、「どうなることかと心配していたが、杞憂であった」とのお手紙をいただいた時の感動は今も忘れない。

Key Person 4

高橋先生ほか多くの方々のお力添えで、古代については東アジア三国を舞台とした刀剣観に言及し、これがその後の日本精神史においていかに独自のものとして展開していったかを、特に呪術の系譜等に焦点を当てつつ明らかにした。さらに全体を俯瞰し、日本刀剣観の重層性をも指摘することができた。この研究成果により、平成十四年三月に「刀剣観の日本精神史的研究：剣術における文化的独自性の探究」と題する論文で筑波大学より博士（体育科学）の学位をいただいた。またこれに加筆修正を加えて、平成十七年に第一書房より『日本精神史としての刀剣観』を上梓させていただいた。

ようやく一里塚を築くことができた。しかしまた、これはあくまでも一里塚である。

肌で感じる刀剣

藤安将平という刀匠と、ここ十数年来親しくさせていただいている。現代刀剣界の桎梏にとらわれることなく、真の意味での古刀再現を追求している数少ない名匠であ

2005

る。特にここ一年ほど一緒に仕事をさせていただいていることもあり、多くの示唆をいただいている。

藤安刀匠の話は実に面白い。生きた刀剣と日常をともにしている刀匠ならではの視点がある。たとえば、刀剣は人の命を奪うものであるけれども、ただ斬るだけであればここまできれいに仕上げなくても良いはずで、武器をここまで美しく高めるのは日本人だけである、という。なるほどその通りである。周知の通り刀剣はまるで鏡のように一点の曇りもなく、きれいに仕上げられる。この美しさが、現在では美術品として世界を魅了している。

ではなぜ、日本人は刀剣をここまで美しく仕上げるのか。それは、古来、そこに自らの心を映し込み、あるいはそこに神性を感じてきたからである。

その美しさは上辺（うわべ）だけのものではない。実際に玉鋼（たまはがね）から鍛錬を重ね、焼き入れまでの工程を目の当たりにして、はじめて理解できる美しさがあった。飾ったものではなく、本質的な美しさである。これに心が映し込まれるのも、感覚としてよくわかる。

＊また、平成二十年に不思議なご縁から企画を思いつき、藤安刀匠にお願いして鹿島神宮で奉納鍛錬を行うことができた。本殿横の垣内に入ったときに触れた神聖な空気は、まさしくここに神が宿ることを感じさせるものであり、そこで鍛錬された刀剣が御神刀となることも深く理解できた。

藤安将平刀匠

刀剣が日本人の心や神を象徴することは、文献の記述から窺い知ることはできる。しかし、生きた刀剣を肌で感じた感性でこれを解釈すれば、新しい発見もあるし、なお深く理解することもできるように思う。

一里塚から再び歩きはじめるにあたり、もちろん今後も文献を読み解いていくのであるが、それに際して新たに肌で感じる感性による可能性を最近特に感じている。

◇

以上、多少筆者である私が前面に出すぎた感もあるが、筆を起こすにあたり、私自身のあるがままの立ち位置を理解していただくため、あえてこれまでの経緯を略述させてもらった。

今後、刀剣について歴史的事実を踏まえながら、その思想の全容を探究する旅を読者の皆さんと一緒に進めていきたい。このことが世界に対して我々は何ものか、つまり日本人のアイデンティティーを自覚することにもつながると確信している。

＊鹿島神宮における日本刀奉納鍛錬の記録映像
バイリンガル・ウェブサイト「武道ワールド」
https://budo-world.taiiku.tsukuba.ac.jp/category/videos-photos/

行間を読み解く“感性”を磨く

文献を読み解く作業を続けてきたが、本当にわかっているのか悩んだ時期があった